

## 『姉妹』

彼女の髪は黄金の蜂蜜色だ。腰まで伸びて一つにまとめられている。その光沢と美しさを見れば、毎日念入りに手入れをされている髪だと解る。

瞳の色は藍色だった。肌の色は乳白色で顔立ちも背の高さもボルメリアに驚くほど似通っていた。

今まで彼女たちは一度として会った事がない。

託宣によって誕生した直後からそれぞれの神殿に預けられ、死別した母親にも、

父たるランキン侯爵ともボルメリアは会った記憶がなかった。しかし一目見て予感のようなものを感じずにはいられなかった。彼女は、確かに生き別れたままの双子の姉なのだ。

「ボルメリア・ランキン卿？」

目の前の少女が発した言葉には肉親としての親愛の情はこめられていなかった。冷たい事務的な確認でしかない。

ボルメリアもその事に何の感慨も湧かなかった。血のつながりこそあれ、二人は一度も会った事のない他人なのだから。

「そうですが、貴女は・・・ペルペティア？」

会った事はなくても名前くらいは知っている。彼女の双子の姉ペルペティアは大地の女神の神殿に預けられたという。その通り。目の前の少女は大地の女神の紋章入りの法服を身にまとっている。

「ええ、ペルペティア・ランキンです。貴女の同母姉になります。初めまして」

「初めまして」

他人が見れば姉妹の挨拶は奇妙なものに見えただろう。だが二人とも異な事とは考えなかった。

特にランキン侯爵の子供たちともなれば、これが普通だった。

「さっそくですが、ご同道願えますか？ランキン侯爵閣下が卿との会見を望んでいらつしやるのです」

「お父上が？」

これにはボルメリアも驚いた。ランキン侯爵はその子供たちにとって血統上の父親でありながら育ての親ではありえない存在だ。閨房での関係、親密度がそのまま政治に反映されるのがランキン侯爵家の特徴だ。

もともと政治的に有力な豪族の出身の娘を母親に持つ子供たちだけが、ランキン侯爵の後継者となり、つまり家族となり、それ以外の子供たちは早々に臣下としての進路を決定付けられる。

ランキン侯爵に神聖性を付加する役割を担ったボルメリアとペルペティアの母は特殊な存在だったが、しかし特殊であり生れ落ちた瞬間から、

それぞれの神殿にその身を捧げられた二人にとってランキン侯爵とは血族としての親しみなどない、他人も同然の父親だった。

特に、ランキン侯爵領の大地の女神の神殿に捧げられ、侯爵領の為に祈り働くペルペティアならともかく、

『悪』を討つ誓いの下、騎士団を出奔したボルメリアに父侯爵が会う理由はない。

志を理解したとしても授爵したのに、その恩を裏切るような行為をした者と公式に会える筈がない。

ボルメリアが驚くのも無理はない。

だがペルペティアは更に彼女を驚かせた。

「私達には父に当る先代の侯爵閣下はお亡くなりになりました。

現在は嫡子アスキスさまがランキン侯爵位を継いでいらつしやいます。

私達には異母兄に当たる方です。閣下は、『天使王国』を放浪された卿と話をされたいと、そうご希望されています。

おいでいただけますか？」

「・・・亡くなられたのですか」

「悪魔の奇襲を受けた際、騎士団が応戦する最中、炎に焼かれてお亡くなりになりました。ご存知ではなかったのですね」

「すみません。こちらも色々あったものですから」

「でしょうね。」

それでおいでいただけるのですか？」

少なからぬ衝撃を受けたポルメリアとは対照的に淡々と質問を繰り返すペルペティア。

ポルメリアは反射的にうなずくしかなかった。

ポルメリアは父親を意識した事はなかった。

騎士団での父親代わりはグリムス・ランズベールであったし、

『悪』に堕ちた彼をその手で殺した事は父殺しの後味の悪さを感じている。

ランキン侯爵など単なる血統上のつながりでしかない。

そう思っていたのに改めてその死を告げられると、思った以上にポルメリアは動揺した。

ペルペティアにとってはそんな葛藤は既に過去のものだろうか？初めて会う姉は無表情のまま、妹を促している。

ポルメリアは姉に従う事にした。いずれにせよ、彼女にはこれからの会議に出席する資格がない。

先ほどと同じように、ただ傍聴席で会議のなりゆきを見守るより他にすべき事はなかった。

その結果次第で彼女自身も戦うべき戦場に身を投じるのだろうか、今は何をすべきか解らない状況だ。

捨てた故国の家族が会いたいというならば会ってみるのも構わない事だ。

ペルペティアの案内で連れてこられたのは執政宮殿の一室だった。

昔から来客用にしつらえられた場所らしい。魔法的な防御も施されている最上級の客間だった。

中にいるのは老若男女問わぬ数人の要人たちだった。濃淡はあれど皆、北方の血を濃くする証である金髪。

乳白色の肌。そしてそれぞれが異なった顔立ちをしているにも関わらず、何処か合い通じる雰囲気を持つ人々。

ポルメリアにも直感で解った。ここにいるのは世代こそ異なれど、皆ランキン侯爵の子女であった者たち。

血筋、能力ともにランキン侯爵領の中樞を担う彼女の伯父や叔母、そして兄弟たちだった。

最初に口を開いたのは中央に座った、やや太り気味の貴公子だった。彼だけが椅子に座っている。

彼だけが微笑みを浮かべていた。おそらく、彼がアスキスだ。ランキンの玉座に座った者の余裕の笑みだ。

「初めて会うが、初めてのようないないな。やはり何処となくペルペティアに似ている。

そなたが『城砦落とし』と名高いポルメリアだな。私がアスキス。現ランキン侯爵だ」

「お目にかかれて光栄に存じます。閣下」

異母兄妹とはいえ兄妹の対面とは思えぬ素気なさだが、並み居るランキンは誰も奇異な事とは思わなかった。同母兄弟で、しかも一緒に育てられ生活を共にしなければ兄弟としての親しみなどなかなか沸かない。そしてランキン侯爵の子女である意味など母方に権勢家を持たなければ意味がなかった。

彼らにとつて過酷な境界を生き延びる資格は、天分と自分で獲得した能力、それ以外にはないのだ。

その意味ではランキンの姓を同じくする意味など、ないも同然と言えた。

この場にポルメリアを呼び寄せたのも、長年離れていた一族の娘と交歓する為ではないのだ。

「さて、我らは北の辺境でそれなりに割拠しているものの、中央の情勢についてはいまいち時節遅れしているようだな。中原を中心に活躍しているそなたの噂は耳にしている。そこで率直な意見を聞きたいのだ」

「ランキンを出奔した者の意見を、ですか」

「善なる軍神に仕える聖なる騎士の意見を、だよ」

「何をお知りになりたいのでしょうか？」

『王国宰相』を名乗るフォリヴァス公。ウォレンサーは元より『天使王国』の旗に集う軍勢全ての糧秣を賄うと大見得を切ったが、それは確実なのかな？」

椅子に座ったアスキスに代わって口を開いたのは、確実にアスキスよりも一世代上のランキンだった。

叔父の一人だろう。昔ランキン侯爵騎士団の閲兵式で見た事がある。確か名前はブラフロス。ランキン侯爵領の家宰を務めていた。

「解りません。確実なのは、中原自体も幾多の戦乱により難民を生み出しているという事です。

農地を耕す者が出奔しているのに、多数の軍勢の食い扶持を得る事ができるのかどうか、甚だ疑問なのですが」

「大地の女神に仕える者たちが逸早くフォリヴァス公支持に回ったが、それはどう思うか？」

「解らないと申し上げるより他ありません。私は市井の者を救う為に戦ってきました。

宮廷の事情については皆様方よりも詳しい情報を持っているとは申せません」

「しかし、そなたが親しげにアンゲルウルプの都市魔術師どのと語り合っているの我らは見ている。

王都の聖なる魔術師は執政宮殿の影の主そのもの。なにかしらの情報を持っているのではないかな」

尋ねる口が変わった。おそらく伯母の一人だろう。ランキン侯爵の宮廷魔術師の長。

もしも代替わりしていないなら彼女の名前はエニシエドだったはず。

白いローブに黒く長いマントを羽織っている。白金色の、六本にまとめられた三つ編みの髪が長く垂れている。

「都市魔術師フィスエシルどのはアンゲルウルプの守護者です。フォリヴァスの魔術師ではありません。

エニシエド殿は彼女か彼女の弟子により伝えられた情報をご存知のはず。私知っているのもそれ以上ではありません。

そして、それは我々がこうして議論を弄んでいる間にも悪魔の軍勢が『天使王国』は元よりテッラムリア全体を滅ぼし、ここを『悪』の世界に変えてしまおうと画策し、侵略を繰り返しているという事実です！」

最後に口調を荒げてしまった事を悔いたが、しかし言ってしまった事について後悔はしなかった。

腹の探り合いで悪戯に時間を費やしている場合ではない。

早急に対策を立てて悪魔の軍勢の、これ以上の侵略を阻止し、

そして撃退しなければ、これから一体どれほどの人々が命を失い、土地や家族を奪われ、路頭に迷うか知れないのだ。

ポルメリアにはこれ以上の茶番劇に付き合う気はなかった。  
主導権争いに現を抜かし続けるなら、すぐにもアンゲルウルプを出てケルマディクへ、  
あの孤児院へ向かって子供たちを守る為に戦うべきだと思った。

確かにそれが彼女の『正論』だった。だが彼らは比較的魔物の脅威が少ない中原で勢力争いを繰り返している諸侯ではない。  
彼らは北方で絶えず人外の怪物たちと矛を交えている『ランキン』たちだった。

「悪魔の軍勢が侵略しているだろ？それは大変だな。だが我々は日々北の山脈を越えてやってくる脅威と戦っておるわ。  
三年前にパリエー伯と遊牧民のルトロウが滅びてからこつち、我らの守りは北方全域に広がってしまった。  
先日山を越えて氷雪の巨人どもが雪狼の群れとともに襲撃してきた。

それらの脅威に中原の連中は何か手助けをしてくれたか？全て我ら北方の諸侯が力を合わせて撃退したのではないか！

『天使王国』は悪魔との戦いに備えてつくられた王国だと？知った事ではないわ！我らは生まれ出でてから死に至るまで、  
北の魔物どもと戦い続ける宿命にある。それは騎士団に属していた貴公もよく理解していると思っただがな、ポルメリア卿」  
大声で怒鳴り返した若者に見覚えがない。だが彼のマントには薊と剣の、つまりランキン侯爵騎士団の意匠があらわれている。  
ポルメリアが騎士団を出た後に入団したランキンなのだろうか？

戸惑う彼女の耳元に囁く声が聞こえた。背後に人の気配はない。魔法でこっそり彼女に教えているのだ。

「彼はラキール・ブラフロス。ブラフロス叔父の息子よ。一年前にランキン侯爵騎士団に入団。  
いくつかの戦いで武名を上げ、家宰の息子という立場もあつて、今は騎士団の副長にまでなっている」

聞き覚えのある声だ。自分を案内した姉だろう。

しかし一瞥してみたペルペティアの顔は無表情のまま、何事もなかったように控えていた。

ポルメリアも何食わぬ顔でラキールに相對した。

「確かに私も三年前までランキンの旗を仰ぎ、幾多の戦いに赴きました。

遊牧民とも刃を交え、諸侯同士の小競り合いを経験し、魔物たちとの死闘を戦い抜きました。

それとて、このテッラムリアが我らが住まう場所であつてこそ。悪魔に妥協は通じません。

彼らの目的は私たちの魂であり、この世界を新たな戦場への橋頭堡にする為の征服です。

際限ない戦いを多次元世界に広げているのです。

私たちは私たちが住まう世界を守らなければならない。それは北の魔物との戦いと何が違うと言うのですか？」

歳若いと言ってもポルメリアよりも幾らか年上である。もしかすると十歳ほど年上かも知れない。

しかし生まれてこの方戦い続けたポルメリアに比べれば、ラキールは普通の若者といつてよかつた。

侯爵令嬢といいながら一介の騎士として生きている彼女と、

ランキン侯爵家宰の息子という血筋で劣つても恵まれた生い立ちのラキールとでは年季が違う。

子供といつてもいいポルメリアに冷静に返されてラキールはいきり立ったが、しかし反論はできなかった。

父のブラフロスが先に口を開いたからだ。

「お説もつともという他ないな、ポルメリア卿。しかし彼の言葉は辺境にいる者たちの本音と考えて欲しい。  
我々は我々の国を、民を守らなければならぬ。悪魔との戦いはあくまでも、その余力があれば、という事になる。  
ご理解いただけると思うが？」

「ランキン侯の騎士団主力をこちらに回すつもりはない、そうおっしゃるのですね。悪魔の跳梁を許すと」

「足元を疎かにして世界を語る事はできぬ。もちろんできる限りの事はさせてもらう。我らもテツラムリアに生きる者ですからな」  
「・・・そのお言葉を信じたいものです」

最後に口を開いたのは、今までのやりとりを椅子に座ったまま見ていたアスキスだった。彼は微笑みを浮かべたままポルメリアを評した。

「善なる軍神の使徒となったそなたに、ランキンの『血』を求めたのは、我らの不明だったかな？」

ポルメリアは静かに頭を下げた。

「我が父、我が母、我が故郷はランキンです。しかし我が使命は『悪』と戦うこと。  
『悪』そのものである悪魔との戦いこそ我が使命。ご容赦願えますなら」

アスキスはそれには何も応えず、ただ身振りで退場を促すのみだった。

これは解りきっていた事だ。

血のつながりはあつても一族、親族、いや家族として過ごした事のない者たちの、  
一体何を信じればいいのか？彼らにとってポルメリアは在野の士でしかなく、  
彼女にとってもランキンの一族は他の高慢な諸侯と何も変わらない。そう、解っていた事だ。

だが、それでも、心が冷えた。自分は血族に対し何か期待していたのかも知れない。

予想通りの会見が終わり、その事に落胆しているのかも知れない。

何にせよ、彼女は疲れていた。もはや茶番に付き合う気にもなれず、一刻も早くケルマディクに向かいたい。そう思っていた。

その時、退室する彼女を見送る為、一緒に出てきたペルペティアが、不意にポルメリアの手を取った。  
剣ばかり振ってきたポルメリアのそれとは違い、祈りを捧げる柔らかい手の感触に彼女は驚いた。

「きー」

ペルペティアは無言を言わずポルメリアの手を引いて廊下を歩き出す。

「公式の場は終わり。ここからは姉妹の時間よ」

彼女が私室として与えられている部屋なのだろうか。殺風景ながらも娘らしい雰囲気のある客間に飛び込む。  
そして戸惑うポルメリアの首にすがりつくように、彼女は妹を抱き締めた。

「やっと会えた。やっと会えたわ。私の半身・・・たった一人の家族に！」

突然の彼女の行為にポルメリアは驚くばかりで、彼女の妹はただぎこちなく抱擁を返す他なかった。

家族という言葉ほどポルメリアにとって縁遠いものはなく、ただただ実感というものも湧かず、途方に暮れるばかりだった。

メルクスに開いた巨大な次元を貫通する深淵の穴。その真ん中にたった一本だけ虚空にそびえ立つ鐘楼。

その最上階で『ワーム』はご機嫌な時間を過ごしている。

もともと計画を立てて他人を煽って実行させる事が好きな『ワーム』は怠ける事が好きな性分だ。

今こうして地獄の門を開け、配下の軍団を呼び寄せ、各個に侵略を展開させる段階になると、問題さえ起こらなければ果報は寝て待て、と言える状況になっており、怠け者の彼ものんびりと惰眠を貪れるというわけだ。代わりに厄介事全てを指図するのはルポレットの役割となった。

個体としての戦闘能力はともかく、この狼頭の悪魔は的確な情報分析能力と判断力に恵まれている。刻一刻テレバシーなり伝令なりを通じて報告される戦況に基づき、彼は大隊単位で行動している悪魔の軍団に対し『ワーム』に代わって命令を下していた。

地獄の門が開いてから数日のうちに戦果は拡大し続けている。

テッラムリア『天使王国』にある五つの地方のうち、南方、西方、中原を中心として全土の三割方を侵食したと言っている状況だ。敵対勢力の組織的な反撃も今のところ発生していない。

掃討戦とっていい状況なので『ワーム』が目くじらを立てる悪魔たちの損害も、ほとんどないと言っていい。

ゴブリンやオークたち、人と敵対する諸族の反応もまずまずと言うところか。

彼らがそれぞれ崇拜する神々を通して呼びかけている訳ではないので雪崩を打って悪魔の軍団に呼応している訳ではない。

だが破竹の勢いで悪魔たちが戦果を広げているし、今のところゴブリンやオークといった諸族を攻撃している訳ではないので、ルポレットが特別編成した勧誘、布告部隊に賛同する部族も多かった。

何しろ宿敵の人間諸侯が次々と城を放棄し、または悪魔の軍団の前に全滅を余儀なくされているのだ。

敵の敵は味方の論理なら、ゴブリン、オークたちが悪魔に味方する事に無理はない。

そろそろ一万規模の戦闘部隊が編成できそうだ。

万事が順調に過ぎていた。順調すぎると言った方がいいか？

しかしルポレットは慢心する事も安堵する事もなかった。

『天使王国』の王都アンゲルウルプに、王国の主だった諸侯や諸族、諸勢力の代表者が集結して会議を開いているのである。その会議がまとまり次第、『天使王国』側は組織的な反撃に出る筈である。

『ワーム』は利益と損害を秤にかけて、直属の上級悪魔たちによるアンゲルウルプ攻撃を諦めている。

その判断は早期に戦争の決着をつけたルポレットとしては残念なものだったが、間違った判断とも言い切れなかった。緒戦で最精鋭の戦力を磨り潰してしまうのは不安だからだ。

とはいえ敵勢力首脳が集結していると解っている場所に、何も仕掛けないのでは芸がない。

そう、攻撃の主力が何も悪魔でなければならぬという事はないのだ。彼は策を講じた。そして、その成果が目の前にあった。

種族でいえばバラバラな集団だった。ドワーフの様に短躯頑健な者もいれば、エルフのように瘦身流麗な者もいる。

一見、オークやホブゴブリンに似た者もいるし、角や尻尾さえなければ人間に近い姿の者もいる。

だが一つだけ彼らに共通する者があった。

爛々と光輝く、他者を憎悪する目と、体の何処かしらにある悪魔の似姿ともいうべき刻印だ。

それは角かも知れないし、尾かも知れないし、蝙蝠のそれに似た翼だったりもする。

鋭い爪や牙かも知れない。鱗が生えた者もいる。要するに憎悪と異形が彼らの共通項だった。

「ルポレットさんよ、話は本当だろうか？」

一団のリーダーと思われる何処かしらエルフの雰囲気を持つ男が口を開いた。

ただその痕跡は尖った耳と瘦身にしかない。

その瞳は地獄の炎のように赤黒く、背中には黒い蝙蝠の翼が映えている。髪も闇のような黒だ。

尋ねられてルポレットは答えた。

「アンゲルウルプに『天使王国』各勢力の代表が集まって会議を開いているのは本当だ」

白々しいその言葉に男は憤った。

「そんなこつちやねえよ。」

アンゲルウルプを襲撃して連中を根絶やしにすれば、俺達を悪魔の一員として認めてくれるという、そういう約束だ！」

「地獄の階級制は信賞必罰だ。功ある者はどんな生まれでも認められる。」

墮天使と呼ばれる天界出身者が地獄で高い地位を認められているのは、周知の事だ。

我々は天界の者のように生まれで差別はしない」

威嚇する彼らにも動じず、ルポレットは淡々と話す。

「お前たちが、その姿、その能力故に迫害されてきたのは承知している。

彼らに復讐を遂げ、更には地獄での階級も得ると言う、一石二鳥の話ではないかね」

彼らは鬼子だ。ごく普通のエルフやドワーフ、人間、オーク、ホブゴブリン等々の母親から生まれた異形の子供たち。自然にそんな連中が生まれる事はない。全ては悪魔のせいだ。

もちろん悪魔が物質界の生き物たちのように性交をする事はない。

魂こそが彼らにとって誕生の種であるし、通貨であり力の源泉だ。そして寿命と言うものが存在しない。

殺されなければ永遠にいき続け、本人の能力と努力と運次第で諸君主の一人にまで登りつめる事ができる階級社会。それが悪魔たちが住む地獄の世界だ。

悪魔は自分の手柄、つまり数多くの魂を我が物にする為に物質界へ現れる。そして様々な悪事を画策し、混乱を撒き散らし魂を刈り取っていく。

その策謀のついでに諸族の妊婦に悪戯を仕掛けるなど朝飯前の事だ。彼らはそういった悪魔の落とし子たちだった。

母親の種族と異なる姿と能力ゆえに彼らは忌み疎まれる。愛された記憶のない彼らには憎悪と優越が刻みこまれる。諸族にはない力をもった優越と、誰にも相手にされなかった憎悪だ。

その力、その性格ゆえに彼らは一応に世界の全てを憎んでいる。

だがテッラムリアとは異なる価値観を与えてやればどうなるか？

それも彼らにとっては『父親』の世界である地獄の価値観、報酬を、だ。

ルポレットの目の前にいる数十体の落とし子たちは、そういったルポレットの『甘言』によって集まった者たちだった。

だが彼らは今までテッラムリアの爪弾き者だった。他の者たちのように悪魔の言葉を信じる事はなかった。

「契約書をくれよ。成功の暁には上級悪魔の地位を保証すると。あんたの名前で保証しろよ」

「いいだろう。一人一人に一枚つつ、アンゲルウルプに生きる者全てを抹殺し、

その魂を『ワーム』閣下に捧げる。それを成した者に上級悪魔の地位を与える。

そう明記し、私、ルポレットの署名を与え、保証しよう。それでいいかね？」

ルポレットは余りにあっさりと要求を飲んだ。そして次の瞬間には彼が言ったとおりの文章が記された、

金印つきの羊皮紙の誓約書が全員の手元に出現する。その手妻に魔法に疎いらしい何人かが歓声をあげた。

交渉役をしていたエルフの血を持つ落とし子は、あまりにも簡単すぎる事に疑念を抱いたようだ。

「どうということだ？あんたみたいなのがほしい許可を与えて、そんなに簡単になれるものなのか？」

「普通に考えれば、それはないな。だが諸君がこれから成し遂げる事の重大さを考えれば、願いをかなえる事は造作もない事だ。アンゲルウルプに集結している会議出席者を根こそぎ殺せば、テッラムリアの諸勢力は当分組織的な抵抗を行う事ができまい。それは戦争の行方を左右する重大な戦果だ。それ相応の報酬はしかるべきではないのかね？」

それとも、事と報酬の大きさに怖気づいたかね、諸君」

何人かが躊躇いがちに互いの顔を見る。だが交渉役の声で決まった。

「いいだろう。全てはあんたたち悪魔の策略かもしれん。だが悪魔は契約を守ると聞いた。アンゲルウルプみたいな廃墟のような街、そこにいる連中を皆殺しにする。簡単な話だ。

上級悪魔の席、ちゃんと人数分用意しててくれよ」

落とし子の一団はその声とともにある者は飛び去り、ある者は消え、またある者は立ち去った。

確かに落とし子たちは母親の種族とは違う能力を持っている。だがそれだけだ。

後は他の諸族のように自ら研鑽し、魔法を覚えたり、武器の腕を磨いたりするより強くなる手立てはない。

集まった数十体は、それぞれそれなりに使えるようだが、正規の戦力として数えるには貧弱といってよかった。

だがルポレットにしてみればまさに、その悪魔であつて悪魔ではないところに使い道があるのだ。

「まあ、何もしていないよりは遥かにマシというものだ」

彼の期待はその程度のものであった。

有体に言うと、ポルメリアは何を話しているのか解らなかった。

ペルペティアが他のランキン一族と相部屋で宛がわれている宿舎に座り、彼女がお茶を用意している間、

ポルメリアは落ち着かない様子で部屋の中を見回すばかりだ。

別にどういう事はない。普段はまったく使われない執政宮殿の一室で、

ペルペティアたちが持ち込んだもの以外目ぼしいものなどほとんどなかった。

辺りを見る事に飽きて、給仕をするペルペティアに目を止める。それが何だか不思議だった。

姿形がほとんど自分と一緒にの別人が、自分の為にお茶を入れている。どうやっていいのか解らない、奇妙な感概を覚える。

「どうだい」

先ほど感情のままにポルメリアを抱擁した事を恥じているのか、ペルペティアは言葉少なかった。

だが彼女がこの出会いを心の底から喜んでる事は理解できた。白い頬に赤味がさし、藍色の瞳には優しい笑みが浮んでいる。

「ありがとうございます」

ややぎこちなくポルメリアは注がれたお茶に礼を言う。ペルペティアもポルメリアから目線を逸らした。

「先ほどはごめんなさい。驚いたでしょう」

「・・・そうですね。ランキンの方たちとお会いして、歓迎されるとは思っていなかったので・・・」

それがポルメリアの本音だった。留まれば軍神に与えられた力を使い、ランキン侯爵騎士団の中核として、



いや侯国の守護者として名声と信頼を得る立場に立てただろうに、

いかに善なる軍神の召命であるとはいえ、彼女は故郷を出奔したのだ。母は違えど一族間の結束こそがランキンの強さだった。彼女の行為は裏切りに等しかった。ラキール・ブラフロスの言葉こそ、ランキン一族の本心であるに違いない。

それを覚悟していたボルメリアにしてみればペルペティアの抱擁こそが意外だったのだ。

「貴女がどう思っていたかは解らない。けれども私はずっと貴女の事を祈っていたわ。たった一人の妹なんですもの」  
ペルペティアにそう言われて却ってボルメリアは恥じ入るばかりだ。

彼女が生き別れの双子の姉の事を考えたことなど、ほとんどなかった。

それを考えるには戦いの日々を送る彼女の日常があまりに過酷で、大地の女神に任せ、心静かに、あるいは恵まれない人々の為に奉仕しているだろう姉に思いをはせる余裕などほとんどなかったからだ。

返事をせずにただ恐縮するばかりのボルメリアを見てペルペティアは少し寂しそうに笑った。

「貴女は、それどころではなかったのね」

「すみません」

「いいのよ。中原に比べれば過酷な辺境で、絶えず蛮族や魔物と戦いを繰り返している。

それが北の大地に住むランキンの誇りであり僻みでもあるのだけれども、貴女は私たちよりも、もっと凄まじい日常を生きてきたのですものね」

「・・・いえ、肉体的にはさほど辛くはないのです。善なる軍神の加護がありますので」

「そうなの？」

「はい。疲れはあまり感じません。傷を負っても治療能力がありますから、よほどの重傷でなければ問題ないです。空腹だけが心配といえれば心配事です」

場を和ませようとボルメリアはそういつて見せた。しかしペルペティアは笑ったりしなかった。

「それだけではないのでしょうか？」

「え？」

「貴女の肉体は確かに疲れ知らずでしょう。それぐらいは知っているわ。

でも、貴女の心は？この数年間、貴女はたった一人で幾つもの生と死を見つめてきたのでしょうか？その事に、貴女はたった一人で耐えてきたのではなくて？」

見透かされたようで少し心が動揺した。そしてペルペティアが同情や好奇心で彼女の事を考えているのでもない事を知った。

「私たちが十歳ぐらいの時は、私は貴女に嫉妬していたわ。同い年で騎士に叙勲され第一線で戦功をあげている双子の妹。ところが私ときたら大地の女神に仕える見習いも見習い。

貴女の話聞いて、神々はなんて不公平なんだと、そう恨まない日はなかったわ。

十二歳の時に、貴女が騎士団を出奔したと聞いて驚いた。同時に失望もした。

そして優越感に浸ったものよ。その頃の私はようやく見習いがとれて正規の神官に慣れたのですもの。

もっとも最下級の侍祭に過ぎないのだけれど。私は貴女がづらいランキン侯爵騎士団の勤めを放棄して逃げ出したのだと思った。

そして姉の私は神殿で確実に認められるようになっていく。私は、貴女に勝ったと思ったの。

ところがしばらくしてから、貴女の噂は中原や違う地方で聞こえるようになってきた。たった一人で城砦を陥落させる者。『城砦落とし』の呼び名が聞こえてくるのにそう長い時間はかからなかったわね。

最初、私は貴女が何をやっているのか解らなかった。

それこそ他のランキン一族と同じ様に、北の大地の過酷さから逃げ出して、

軟弱な中原で英雄気取りをしているのだと思っていたわ。でも色々な噂話を聞いてみると、それが違うのだと解ってくる。

貴女の話は決して褒め称えられるものばかりじゃない。

恨まれている事も、憎まれる事も、賞金がかげられたという話も聞こえてくる。

けれどもそれは、貴女が誰と戦っていたのかという証なのだ、長い間かかってようやく解ったわ。

同時に貴女が何故、ランキンを飛び出したのかも理解した。

貴女は、『悪』と戦わなければならなかったのね。誰にも助けを求めず、一人で」

「・・・本当は一人で戦う理由なんてないのです」

ポツリとボルメリアが呟いた。

「私は、本当に、自分でも嫌になるくらい不器用で、

話したり考えたりする前に行動が先にたつてしまつて、そして大きすぎる敵と戦つてしまうのです」

「それでも戦わずにはいられない。いや、戦わなければならないと、思っているのでしょうか？」

それが貴女の宿命。祈り続ける事が私の宿命であるのと同じ様にね」

ペルペティアは苦笑していた。

「お互い、難儀な託宣を抱えて生まれたものね。そんな事、こっちは何も知らずに生まれてきたのに、お前の人生はこうだ、つてあらかじめ決められているんですもの。いやになっちゃうわ。

私だってできる事なら剣をとつて戦う訓練とか、ダンスの稽古とか、色々試してみたい事があつたわよ。その中で自分にあつた人生を選んで生きてみたかつたわよ。

でも、私はたぶん、結局祈る人生を選んだかも知れないわね。貴女もそうなんでしょ？」

「私は剣以外の人生が考えられません」

溜め息を漏らしてペルペティアは言った。

「真面目ね、貴女は」

「よく言われます。もつと息抜きをしろと」

「でも息抜きの仕方を知らなかつたら、できないわよね。私もそうだし」

「そうなのですか？」

「息抜きをするよりも、色々な事を考えてしまうのよ。

神殿の儀式のこと、孤児院や養老院の運営、寄付された神殿の荘園の経営、神話の研究、大地の女神のご意志をいかにテツラムリアへ伝えるのか、そんな事を四六時中考えて考えていたら、何時の間にかこの歳で神殿を一つ任されるようになっていたわ。まあランキンの血が物を言ったのかも知れないね。侯爵付きの神官団の一員に入るのは、そういうことなんでしょう。」

しかしボルメリアはペルペティアのように、愉快そうに笑う事はできなかった。

「少し、羨ましいです」

「どうして？」

「貴女は、そう言いながら大地の女神に仕え、祈る事に生き甲斐を感じている。でも私は・・・良く解らないのです。剣を握り剣で戦うより私には能がない。もっと他にいい方法がなかったのだろうか？もっと他に何か別の手段があったのではないだろうか？そんな事をいつも考え、良い考えは浮ばず、結局剣を振るい『悪』を滅ぼすという題目の下、私は血を流し続けている。これは善なる軍神の御心にかなうのか？かなうならば何故なんの応えもないのか。」

時々私は解らなくなります」

それだけではない。

守るべき者を守りきれなかった時、守った者たちから白い目で非難される時、何もかもが血潮に濡れて死に絶えた時、自分が歩いてきた道が本当に正しいのかどうか、解らなくなる。

『悪』を滅ぼす為と言いながら戦い続け、死体の山を築く事に意味があるのかと、迷い続けている。

だがペルペティアはそんなボルメリアの迷いに単純明快な答えをつげた。

「神の御心にかなうから、神は貴女に何も文句を言わないのよ」

「えっ？」

「だってそうでしょ？私達神官や、神々の召命を受けた聖なる騎士の力は、私達が信じ、私達を加護する神々の力を源とするもの。」

神の御心にかなわない者を助けて下さると思う？私はそんなに神々が心の広い方々だとは思わないわ。

どれだけ祈っても病に打ち勝つ力のない子供や老人は死んでいくし、魔法の力で局地的に天候を変える事はできても、王国全土、北方はおろかランキン侯爵領すら天候不順を変える事はできない。

自分たちの非力さを一番思い知らされるのが大地の女神に仕える者たちだと、私は思っている。

それでも神は私たちにいくばくかの力を分け与えて下さる。その力を女神にとつて正しい事柄に使いつける限り、私達、大地の女神に仕える者は信仰による魔法の力を行使できるのでしよう。

貴女だって、今もその力を使う事ができるのでしよう？ならば心配無用よ。

貴女の行いを軍神はちゃんとご覧になっていて、認めていらつしやるのよ」

「では血塗られた道を進む事が、軍神の指し示された私の人生だと、そういう事なのですか？」

思わずボルメリアは絶望しそうになる。だがそんな彼女の両手をペルペティアは優しく包み込んだ。

「優しい子ね、ポルメリア。悪しき魂にも貴女は哀れみの心を失わない。そうね。もしそれに耐えられなくなったのなら、私の神殿にこない？」

「そうよ！貴女みたいな傷つきやすい子を騎士にしておく方が間違っているのよ。」

一緒に大地の女神へ祈りを捧げ、恵まれない子供たちや静かな余生を望む老人たちの手助けをして生きていかない？」

それが貴女にあっているなら、きつと軍神も転向を認めてくださるわ。それがいいわ、そうしましょ」

これにはポルメリアも驚いてしまった。軍神に捧げられ『悪』との戦いを死ぬまで続けるのが自分の定めだと思っていた。ところが姉は事もなげに、そんなに辛いなら軍神から大地の女神へ転向しろという。そんな事を言う人は初めてだった。そんな事が可能なだとポルメリアは考えた事すらなかった。この双子の姉の発想力に彼女は圧倒されてしまいそうだった。

戸惑うポルメリアが何を言うべきか迷っている時、遠くの方で地響きのようなものが轟いた。戦士の習いでポルメリアの顔に緊張が走り、直ちに臨戦態勢になっていく。

「失礼！」

呆然とするのは今度はペルペティアの番だった。ポルメリアは素早く手近の窓から外へ身を乗り出し、辺りの様子を窺う。見えたのは遙か郊外で立ち上った土煙の柱だった。その向こう側に幾つか執政宮殿に向かって飛来するものがある。

目をこらせば、それは悪き心を持つ者たちと解る。相手が何者であれ、

これはアンゲルウルプの諸侯会議を狙って襲い掛かってきたに違いない。

となれば、背後にいるのは悪魔の軍勢、そして『ワーム』その人だ。

「敵襲です。迎撃します」

ポルメリアはそれだけ言うと自分が持てる装備全てを用意した。

銀色に光る『悪』を撃つ愛剣、重装甲の鎧、そして『龍殺し』トゥルスの形見である、見えない翼もつ軍靴。

彼女が軍靴に合図を送ると、それは透明な翼を広げ彼女の指示どおりに完璧に飛行を開始した。

あっという間に飛び立ってしまったポルメリアをしばらく口を開けて見送ったペルペティア。

しかし我に返ると苦笑しながら溜め息をついていた。

「なんだかんだ言っても戦士である事が板についちゃっているのねえ。殺す事に怯えているのに、戦う事には怯みもしない。やっぱり貴女は、誰かを守って戦う事が性にあっているのよ、ポルメリア」

空高く舞い上がったポルメリアに姉のぼやきは届かない。今の彼女には殺す事への恐れも、死体を築き上げる悲しみもなかった。ただその胸に沸き起こるのは、ペルペティアを始めとしてアンゲルウルプにいる全ての者を守る為に戦うということ。

「夢もなく恐れもなく、ただひたすらに『悪』を撃つ」

その眩ぎの下、彼女は矢のように襲撃者の群れに突っ込んでいった。

都市魔術師フィスエシルの座所は先日の襲撃以来、アンゲルウルプを魔法的に防御する為の指令所となっていた。

彼女にはエルフ、人間、その種族を問わず十数人の弟子がいる。

魔術師ギルドの位階は高くなく、その為ギルドへの貢献も低く、

また学術的な研究もそれほどやっていると云えない彼女にこれほど多くの弟子がいるというのは意外な事だったが、

しかし天使の血引く者であり、長く生きたために持っている広大な人脈を持つ彼女は、

それを持たない者からすれば大変魅力的な存在であり、

師匠とは別に、その人脈を利用して勉学に励もうという弟子が良く集まってきた。

それに広い人脈を持つフィスエシルならではの魔法の才というものがあつた。直接的な破壊力に優れた魔法を扱う事は、彼女の得手ではなかつた。

彼女が得意とするもの、それは複数の術者を同調させ力を増幅させること、そしてそれを支配、指揮することだつた。今、彼女は異変を聞きつけ座所に戻っている。

「情況は？」

「対『悪』の魔法結界が反応していません。他次元からの来訪者、悪魔ではないようです。

監視網から目視する限り、悪魔の姿形に似た者が数十体、空と地上からアンゲルウルプに侵入してきたようです」

アンゲルウルプに施された結界は別次元からの侵入者を拒むようにはなっているが、

同じテトラムリアの住人に対しては機能しない。つまり侵入者は悪魔に似て悪魔ではない何かだつた。

「鬼っ子かぁ」

フィスエシルの呟きに報告をするエルフの弟子が答えた。

「でしょうね。個体の外見がものの見事にバラバラです。

地上から侵入してきた者の中には巨人ほどの大きさの者も何体か含まれています」

「本来なら同じ世界の同胞だけど、虐待された過去を持つ彼らには、そんな気持ちはこれっぽっちもないでしょうね。どつちにせよ、私たちだつて死にたくないから退散してくれるまで攻撃するしかないのだけれども。

地上の連中は、とりあえず諸侯たちに任せてみましょう。

各宮廷魔術師、神官たちに伝達して。数と侵入方向をできれば地図つきで。それで時間稼ぎしてくれたら、めっけものね」

「空は？」

「射程に入ったら、お熱いのを浴びせてやって。どれだけ辿り着けるか、見物ね」

諸侯同士の争いに都市魔術師が介入した事はない。

アンゲルウルプが建設された当初から、この王都には対悪魔用の複数の魔法防壁、そして攻撃手段が用意されている。だがこの王都が悪魔やその配下に襲撃を受けた事は、かつて一度もない。その手段を使用するのも今回が初めてだ。自動的に目標に当たる電撃の光線を、都市の魔法陣が発射できるという事を、他の諸侯は誰一人知らない。

だがフィスエシルの言葉に異論を述べる者がいた。監視網を目視していた人間の若い弟子が叫んだ。

「待って下さい。執政宮殿から誰か空中に飛び出してきました。侵入者と交戦するつもりでしょうか。侵入者の姿形からみて『城砦落とし』だと思われませんが・・・」

「それなら問題ないわ。彼女ごと撃つて構わない」

フィスエシルの言葉に複数の弟子達はどよめいた。

どのような評判であろうとも彼女は善の軍神に仕える聖なる騎士であり、つまり去就をはっきりさせない諸侯に比べればよほどはっきりした味方である。

その彼女を巻き込んで電撃攻撃しているものかと、皆、こともなげに言った半天使の師匠を不安げに見ている。それに気付いてフィスエシルは苦笑した。

「本当に問題ないのよ。彼女は天使の血が半分流れている私よりも、よっぽど天使そのものに近いのよ。電撃、冷氣、石化は、どんな高レベルな呪文であろうともまったく受け付けないの。魔法障壁とかそういうものじゃなくて、その手の攻撃に対して完全に耐性を持っている。だから、彼女の事は無視して、やっちゃって構わないのよ」

弟子達は半信半疑の表情を浮かべている。無理もない。フィスエシルの性格は危険だ。その言葉を鵜呑みにするのは躊躇われる。しかし電撃の射程に襲撃者が飛び込んだら四の五の言えなくなる。

アンゲルウルプの都市魔術師とその弟子達は、構築された防衛機能の性能を上げて運営する事はできても、実際の戦闘力ではたかが知れている。悪魔の血が半分でしかない鬼子相手でも、まともに戦える事はできないだろう。

フィスエシルの言葉が嘘とか、彼女の思い違いだったとしても、自分たちの身を守る為には、結局電撃光線で上空の侵入者を攻撃しなければならぬのだから。

アンゲルウルプの執政宮殿上空に飛来した鬼子たちは五十体あまり。

そして空を飛ぶ事が得手ではないらしい者は地上を歩いて廃墟と化している市街地に侵入してくる。その数は二十体だろうか。

空に舞い上がってポルメリアは一瞬迷った。

離れて見ると廃墟にしか見えなくても、屋根や壁が健在な建物には人が住み着いている。

異形の侵入者たちは彼らに襲いかかるのではないだろうか。そんな疑問が頭を過ぎる。

だが飛来する敵の方が早く執政宮殿に到着する。

そこには姉のペルペティアやフィスエシル、そしてフォリヴァスを始めする貴顕が集まっている。

彼らが殺されれば『天使王国』、いやテッラムリアそのものが反抗能力を失うのだ。

優先順位は明らかだった。

ポルメリアは悪意を見通す目で、空からの侵入者の中でもっともその禍々しい光が強く大きい者を探した。

それが恐らく指揮官だ。

それは集団の中央にいた。エルフの痕跡を持つ異形の者。姿形はそれほど特異なものではない。だがその実力は群を抜いていた。

戦うべき相手を見つけて飛ぶ。相手もポルメリアを見つける。

彼女は愛用の『悪』を撃つ大剣を振る。敵も優雅な細身の刀身ながら両手で扱わねば振る事もできない長剣を使う。

相手の剣筋が早すぎて打ち合いにはならない。

『城砦落とし』か！どおりで報酬の気前がいいわけだ！

異形の者が呪文を唱える。低レベルの呪文などまったく問題にならないと言いながらポルメリアは身構えた。

だが、その呪文は違った。彼女に向けて放たれたのではない。自身の剣に向けられたものだ。

一瞬で終わった呪文の詠唱と同時に相手は長剣を振るって攻撃してくる。

打ち合いではなく切り裂く事を目的にした優雅なエルフの長剣。これなら彼女の鎧で防ぎきる事ができそうだ。

ところがそれは大間違いだった。一瞬にして相手の刀身が異空間に吸い込まれるのを彼女は見た。

同時に我が身を容赦なく切り裂く激痛を感じる。苦し紛れの一刀をポルメリアは放った。

ところがどう見ても盾も鎧も着ていない筈の相手は、彼女の愛剣を弾き返したのだ。

迂闊だった。相手は敵を攻撃するのではなく、使い手自身を強化する術者。魔法剣士だったのだ。

「いいねえ。俺はあんたみたいな重装の鎧を着込んだ装甲馬鹿の相手が得意なんだ。

いくら頑丈なあんたでも、自前の装甲がないに等しいなら高速治療する前に切り刻んで殺す事ができるだろう。

俺は運がいいな」

魔術師の呪文に、装甲を無視して攻撃できるものがある事は聞いた事がある。しかし実際にそれを目の前にしてポルメリアは戸惑った。魔術師といえば身振り手振りの邪魔になる重装の鎧も盾も持てない。だから接近戦に持ち込めば自分が圧倒的に有利になると思っていたのだ。

ところが目の前の異形は見えない盾や鎧を装備しているようだ。それも恐らく呪文で用意されたものなのだろう。ポルメリアと同等の装甲を持ち、しかも異空間を通じて彼女の鎧をまったく無きものとして攻撃する手段を持つ相手。確かにこれは分が悪かった。

ポルメリアは斬撃ではなく殴打の衝撃で相手にダメージを与えようとする。

相手は容赦なく鎧などないもののようにポルメリアを切り刻む。救いなのは相手の長剣が『悪』ではない事だ。だから彼女の物理攻撃に対する障壁が作動してダメージを軽減する。

とはいえども相手は満身の力を込めて大振りで攻撃しても彼女に当てる事ができるのだ。

では、その優雅な両手持ちの長剣がなければ？

ポルメリアは狙いを変えた。そして切っ先の鋭い相手の長剣を殴りつける。

もともと相手を切り裂く薄い刃の剣だから、無骨な彼女の愛剣に力一杯殴られただではすまない。相手の武器も魔法の物品だから一撃で粉砕される事はなかったが、華奢な刃はひしゃげてしまった。

「ちっ、嫌な事をしやがるな。だがあんた、噂ほどやり手という訳じゃないな。

俺との戦いかまけて、大事な事を忘れてやがる。『正義馬鹿』はやっぱり馬鹿だなっ」

最初は相手の負け惜しみかと思った。だがそうではない。ポルメリアは執政宮殿に迫る敵を迎撃しにきた筈だった。ところが目の前の異形と戦う事に夢中で、何時の間にか敵の集団もろとも執政宮殿の上空に移動しているではないか。しくじったと思うがどうする事もできない。

「かかれっ」

エルフと悪魔の合いの子である目の前の異形が号令する。空飛ぶ異形の群れは執政宮殿に向けて突撃を開始しようとした。

だがまさにその時、執政宮殿上空は眩い閃光で塗り潰された。一瞬ポルメリアには何が起きたのか理解できなかった。それはただ眩しいだけで彼女には何の危害も与えなかったからだ。しかし周りを見回してすぐに気が付く。

異形の者たちは一様に、その閃光、宮殿各所から飛んでくる電撃の光線に焼かれてもがき苦しんでいた。

他次元からの来訪者は例外なく物質界の現象に何かしらの耐性を持っているものだ。

天使が電撃や冷氣、石化を問題にしないように、悪魔も酸や毒、炎に無頓着だ。

それ以外の攻撃を受けても物質界の生物よりも頑丈ではある。

が、ポルメリアのように電撃の渦の中で平気な顔をしていられるほどではない。

悪魔の血を受けた異形の者たちは苦しみがきながらゆっくりと電撃で焼かれていった。

黒い消し炭になって大地に落ちていく者。

半死半生で宮殿まで降りる事ができても、待ち構えていた諸侯護衛の精鋭騎士に殺される者。

彼女は知らなかったが結果として襲撃者たちはポルメリアに誘い込まれ、一方的に電撃攻撃を受ける事になったのだ。

「くそ、はめやがったか！」

群れを束ねる長であるエルフと悪魔の合いの子は、流石に電撃の渦の中でも生きていた。しかし武器はなく、半死半生である事には変わらない。

そのまま逃げてもポルメリアには追いつもりはなかったが、彼の方にその気がなかった。

「こうなったら『城砦落とし』、お前の首だけでも頂いていくぜ」

突っ込んでくる相手の手の平が赤く光っているのが解る。

天使が苦手とする炎の攻撃を直接ポルメリアに、鎧ごしに叩き込もうというのだろう。彼女も覚悟を決めた。命を捨てて勝機を掴もうとする者への礼儀だ。剣の切っ先に集中する。勝負は一瞬でついた。

擦れ違い様に放ったポルメリアの一刀が彼の胸を捕らえる。背骨が折れる嫌な音が、感触として伝わる。相手の手は虚しく空を掴むだけだった。

弾き飛ばした相手が絶命し、力無く落ちていくのを悲しげに見届けたポルメリアだったが、耳にした地響きの方に注意が向いた。アングルウルプの廃墟のような市街地に侵入した別の連中が、人々を面白半分には追いつているのが見える。巨人ほどの大きさの、鬼子たちが何かを追いかけているのが見える。

「ポルメリア、無事なの！？」

執政宮殿の窓から姉ペルペティアが顔を覗かせている。凄まじい電撃の後だから心配しているのだろう。鎧を無視して刻まれた傷の方が痛むが、それも徐々に治りつつある。ポルメリアは微笑んだ。

「私は大丈夫。でも戦いは終わっていない。だから行きます」

ペルペティアが止める間があればこそ、だ。姉が何か言う前に妹はもう飛び去っていた。

戦い殺す事を厭いながら、やはり誰かを守る為に剣をとってしまふ。そういう性分なのだろう。呆気に取られたあと、ペルペティアは苦笑交じりで呟いた。

「なんだかんだ言っつて、やっぱり戦う事が身についてしまっているのね。でも、それは貴女が考えているほど呪わしい事でもないかもよ」

遠目にもポルメリアが巨体の持ち主に突っ込んでいくのが見えた。そして何度かの打ち合いの末、異形の巨人を倒す土煙が見えた。遅ればせながら諸侯の騎士たちが騎馬に乗り重装備で市街に出撃するのが見える。

ラキール・ブラフロスたちもその中にいるだろう。彼らは獅子奮迅の働きをするポルメリアを見て、何というだろうか？

そんな事を考えながら顔に笑みを浮かべていた時、ペルペティアは配後に気配を感じた。

振り向けばそこにはランキンの宮廷魔術師長であるエニシエドがいた。

「どっかっ」

ペルペティアが知る限りエニシエドは冷徹な人物だ。ランキンの宮廷とその領国の守る為にはどんな手段を取る事も厭わない。ペルペティアに同母姉妹の情けでポルメリアを口説き落とすように命じたのは彼女だ。

ペルペティアは微笑みを浮かべたまま、首を横に振った。

「彼女は善なる軍神の使徒であると同時に、誰かを守る為に剣を取る戦士です。

ランキンの為だけに、と限定させる事は無理ですよ」

「失敗か。血のつながりも当てにならぬものだ」



エニシエドは何十年もの間、ランキンを守る為だけに生きてきた。彼女にはそういう託宣が下ったのだとも言う。単なる噂かもしれない。だが彼女の人生は噂通りのものだった。

厳しい皺が刻まれた彼女の横顔は、清冽な美しさに満ちているとペルペティアは感じた。

「彼女はテッラムリアを守る為に戦うでしょう。そしてランキンはテッラムリアの一部です」

ペルペティアの気楽な言い草にエニシエドは眉をひそめた。

「そなたは『祈りの乙女』と言われているらしいが、私に言わせれば軽薄に過ぎる面がある」

「そうですね？でもランキンを守るのはランキン一族です。私にもその誇りはあります。

我が故国を守る為に、私は祈り続けます。そして貴女はその叡智を駆使すればいい」

そしてボルメリアは自らの剣が及ぶ範囲で人々を守るのだろう。

市街で爆発が起きた。同時に歓声があがる。またボルメリアが敵を倒したのだろうか。

先ほどまで聞こえていた戦いの喧騒は少しづつ遠のいていく。侵入者は撃退されそうだ。

それを成し遂げた魁となったのは、私の双子の妹なのだ。

エニシエドは不機嫌な顔のままだ。だがペルペティアは満ち足りた笑顔でいる。

ここに来て本当に良かった。ペルペティアはそう感じていた。